

## 序

針塚長太郎先生は、明治三十九年二月実業教育研究調査のため、二カ年間米独に留学を命ぜられたが、帰国後直ちに上田蚕糸専門学校創立委員長となり、最新の知識抱負を傾けて使命に邁進し、四十三年八月三十八才の若さで、同校の初代校長に任命された。当時わが蚕糸業は輸出の大宗として、国際的にもその重要性がいよいよ増大しつつあったので、これが一段の向上発展を期する必要上、当校の創立を見たのである。従って若い針塚校長に対する国家・業界の期待は、特に大なるものがあつた。先生もこの期待に応え、先ず以て教職員と研究陣容の整備に努め、これに伴う設備・施設の充実を期して、早く創学の苦難を克服し、業界・学界に優秀・有為の人材を送り出すことが出来た。かくて昭和十三年三月の退官まで、実に二十八年間に亘って「一事貫行」、斯界のために、「挺身従事」したのである。

先生逝いて十三年、その間わが国情や国際環境は、激動を続けながらも、漸く安定度を加え、特にわが国の経済・政治・文化は、世界の奇蹟と言われるほどの、大幅な発展成長を実現した。これはわが民族独特の努力精進に依るものと、一般外国側では見ている。これは先生が一生をかけて、率先唱道し、実践された人間道たる「流汗鍛錬」・「実践躬行」・「協力邁進」・「竭力致身」などの東洋的聖訓が、無意識裡に、わが民族の血肉となつている結果と見てもいいと思う。先生はかつて戦後の世情を嘆かれて「新玉の年は迎へど大君の静けき春はいつに待たなん」と詠まれたが、日本の現状は、大勢として先生が「いつに待たなん」と言われた「春」が、到来しつつあると言い得るのである。

この時に当り、上田蚕糸(織維)専門学校「現信州大学織維学部」の卒業生によつて結成されている社団法人千曲会が中心となつて、「針塚長太郎先生―その伝記と追想記―」が発刊されることとなつたのは、一生涯先生の格別な配慮指導を辱うし、常住坐臥、その徳を慕い、一生の師表と仰ぐ私どもに取つては、真に嬉しい限りである。ここに謹んで

「刊行会」に対し、満腔の感謝を捧げると共に、これによって日本精神の象徴とも言うべき針塚先生の間像が、広く世に知られんことを、切望して止まない。

謹白

昭和三十七年二月一日

井上柳梧